

山で溺れる

先年のスマトラ島大津波の、浜辺を駆け上がる凄まじい勢いの濁流の映像を見て、四十五年前の高原の溪谷での遭難を思い出した。こともあろうに日本晴れの信州の山の中で、青年男女十余人が危うく溺死しかける椿事であった。

昭和三十七年の春、医学部を卒業した私は十一人の仲間と共に長野県の佐久病院のインターンに採用された。南佐久の千曲川畔に展開するこの病院は若月俊一院長の声望つとに高く、当時既に農村医学のメッカであった。

他の病院ではあまり見られない特色のある行事があったが、例えばまず五月の「病院開放」がある。二十四節氣に合わせて五月中旬の小満には、近在の人に病院の外来施設を開放し、各科が工夫を凝らして展示を競う催しを「小満祭」と称し、田植え前の休日とあって随分の人出を呼ぶ。

今でこそ「小満」は「立夏」のほど二週間後、旧曆で云えば秋に蒔いた麦の穂が出揃う頃の節氣と判るけれど、初めは近所の稻荷山公園の桜祭りのことかと思った。山陽の町育ち

で節氣など何も知らなかったのだ。

実はこの病院でのインターンを志望したのも、農村医学を主導する先進的な病院だからという殊勝な理由も少しはあったけれど、それが第一であったのではなくて、憧れの信州の田舎、地図を見ると八ツ岳が近くて土曜日には宿舎から歩いて登れそうだななどと、山遊びの都合が決め手だった。

五月から始まったインターン暮らしの最初の配属先が小児科で、ここで一緒になった九州大学出身の村上君は九大山岳会のベテランで、私と同じように山の道具をちゃんと福岡から持って来ていたし、八ツ岳近辺も研究していた。このあと一年間、休日には彼と八ツ岳を彷徨したけれど、横着な私はいつも彼のプランに乗っかって後を付いて歩いた。

年賀状によれば八十歳に近いのに、彼はまだ山歩きを続けているらしい。

診療にはまるで役に立たないインターン生もお祭りとなると、俄然重宝される。ことに五月は「病院挙げての盛大なメーデー」「稻荷山の花見」「小満祭」と出番続きで、配属先

の小児科での「仕事」は繁忙を極めた。

入梅前の日曜日、小児科の看護婦さんたちから慰労のための野辺山高原へのハイキングにお誘いがあった。村上君と一緒に、厨房で作って貰った大きな砲丸のような握り飯を二つ持って、早速愛用の登山靴で勇躍参加した。小児科医長とインターン二人、看護婦、看護学生など総勢十数人、往路は白田から初めて乗る小海線で野辺山まで行く。地理はさっぱりわからないけれど、駅から歩きだしてまず飯盛山に登ったらしく、綺麗に円錐状に盛り上がった草山の頂きに登り着いて、向こうを見たら不意に大きな富士山に直面することになって吃驚した記憶がある。高原鉄道で有名な小海線も、ここまでは千曲川上流の溪谷伝いに登って来たから、富士山がついそこにあるとは知らなかったのである。

一枚も写真が残って無いのが本当に残念である。

遠望すれば緩やかに波打つ山麓の樹林も、緑を剥がして見れば、八ツ岳から流れ落ちる大量の水が溶岩台地を島の様に

残して浸蝕した結果、網の目の様に錯綜した溪谷とそれに縁取られた台地の連続する幼年期の地形である。その中に入り込めば丘と溪谷の連続で、展望の得られる丘陵の背に登るのには、まず谷を渡らねばならない。現に皆で輪になって弁当を広げた草原には、飛び石伝いに谷を渡って登って来たが、このところの晴天続きで谷は明るく乾いていた。ところが食ったり歌ったりで時を過ごし、そろそろ帰るか移動を始めて仰天した。谷の様相が一変している。

茶色に濁った速い流れが谷を充たして泡立ち渦巻き、しかも刻々と目に見えて水量が増えつつある。相変わらず中天に太陽が輝いて、ここには雨の気配はまるでないけれど、どこか上流に降った夕立による鉄砲水だったのであろう。

長雨に降りこめられたのではないから、落ち着いて水の引くのを待つべきだったのかもしれないが、退路を断たれて孤立しているという不安から、誰云うとなく先程渡ってきたルートを即刻引き返すことになった。今ならまだ渡渉出来る筈だという願望の先行した判断ミスである。

例の津波はインド洋に数本しか収まらない程の長大な波長だったというから規模は大違いだけれど、とめどなく膨れ上がる海の映像は、狭い溪谷の中で躍り上がりつつ流れ来る濁流を眼のあたりにした時の当惑を思い出させた。

対岸の樹が一番張り出していると思われるあたりで、全員手を繋ぎ合って縦一列に水に入る。胸までの深さだが流れが強いので、まず足場を確保して身体を斜めにして抵抗しないと浮いて倒されそうになる。隣が踏ん張れたら自分が足場を作るといふ具合にして少しずつ進む。しかし先頭が対岸の樹の枝を掴めないうちに、後続が耐え切れずに押し流され始めると列は乱れて将棋倒しとなり、あとはみんな夢中で抱き合い、牽き合い、必死に水を掴む。何がどうなったも判らないまま、随分と下流に流されながらも全員が対岸に辿り着けたのは、稀有の幸運としか言いようがない。

私ももがいているうちに突然足が川床に着いて、流れの中に立つことが出来、その拍子に一人沈みかけている看護学生の背中を掴んで牽き戻すことが出来た。これが後年つれあい

として生涯の大部分、五十年を一緒に過ごすことになるヒト
とは思ひもしなかつたけれど。

ズブ濡れになって這い上がった私達の頭上には初夏の太
陽が眩しく輝いている。新緑のブナの森の中を微風が渡り、
微かに虻の羽音がするだけの、大動乱のあとの静寂。

「・・・すべて世はこともなし」

誰も死ななかつたけれど、もし誰かが死んだとしてもこの
風景には何の変化も無いのではないか、特別な何かが起こつ
たわけではないし、何も起きなかつたわけでもない。

人は簡単に死ぬ。そして自然はいつも素知らぬ顔である。
私達はことば少なに山を下った。

(神庫 二〇〇七年 三月)